伊達地区小学校長会 第135号(1)

太報 伊達 135

発行日 令和2年3月16日 発行者 伊達地区小学校長会 会長 高 橋 孝

編集同広報部

《巻頭言》



若手教員の授業力を育てる

伊達地区小学校長会副会長 二階堂 康男

(伊達市立梁川小学校長)

1 はじめに

ベテラン教員の大量退職と若手教員の大量採用時代を迎えている。これからの学校を担っていく若手教員をどう育てていくかは、学校経営の喫緊の課題である。特に、学校の命である授業を中心に、若手教員の授業力を育てていくことが大きく求められている。

2 初任校時代を振り返って

自分の初任校時代を振り返ると、当時の校長先生や先輩の先生方から、授業について常に刺激を受けていたように思う。A校長先生からは、「若い先生方は毎月指導案を書いて授業をするように」と言われた。B先輩からは、「今度の小教研の授業、若いんだから先生やってみたら」と言われた。

まだ、教員になって2,3年目の自分にとってどちらも大きなハードルであった。A校長先生の「毎月の指導案」は、学期1回指導案を書くことがやっとであった。B先輩の「小教研の授業」は、引き受けることになった。夏休み中から指導案を書き、外部の先生にもご指導いただきながら準備を進め、授業に臨んだ。当日の授業では、今まで以上に意欲的に取り組む子どもの姿を実感し、授業に対して自分なりに少し自信がもてたことを覚えている。このように、授業への取り組み方について刺激を受けるとともに、育つ場も与えていただいたように思う。

3 若手教員の授業力を育てるには

自分なりに考えていることは、「基本を教える」「ほめて育てる」「自分の授業の課題を意識させる」の 3点である。

(1)「基本を教える」とは、指導案の書き方から板

書や発問の仕方をはじめ、授業の基盤となる学級づくりの在り方等、若手教員の授業を参観しながら、少しずつ時間をかけて指導することである。

- (2)「ほめて育てる」とは、経験が少なくても努力した点や良い点は必ずあるはず。よいところを3つほめて、課題となる点を1つ話す。「また実践してみよう」と意欲をもたせることが大切である。
- (3)「自分の授業の課題を意識させる」とは、授業スタンダード等をもとに、自分の理想とする授業像をもたせることである。そして、自分の授業の課題を常に意識して日々の授業に生かしていこうとすることである。

4 大事にしたいこと

若手教員の授業力の育成で大事にしたいことは、 中堅やベテラン教員を含めて、学校全体で授業について語り合う場や雰囲気をつくることである。これは、現職教育で一番大事にしたいことである。

例えば、若手教員の指導案を学年等で話し合い、 その指導案で中堅やベテラン教員が授業をして見せる。あるいは、若手教員が他の学級で授業をしてみる。事後研では短時間でも授業のよさや課題を話し合うなど、同僚性を生かして授業について共に考える現職教育が何より重要である。

5 結びに

「子どもが育つ学校は、教員が育つ学校」でなければならないと考えている。校長が授業力を育てることを重視した学校経営を行い、中堅やベテラン教員と関わらせながら、若手教員が自らよりよい授業を求めるように育てていきたいものである。

第135号(2) 研究部より

《研究部より》

子どもたちの幸せのために

研究部長 堀 部 誠

(伊達市立伊達東小学校長)

1 平成30・31年度の研究を振り返って

今年度,伊達支会では,第48回福島県小学校長会研究協議会いわき大会において,以下の研究分科会,研究課題,視点で,研究をまとめ,発表した。

<発表分科会>

【第7分科会(視点2)学校安全】

「安全・安心な学校環境作りと校長の在り方 〜地域等との連携・協力を図った意図的・ 計画的な取組の推進〜」

(担当校:梁川小,柱沢小,掛田小, 小手小,半田醸芳小,睦合小,国見小)

<希望分科会>

【第6分科会(視点2)研究・研修】

「学校の教育力を向上させる研究・研修と校 長の在り方~将来への夢や展望,参画意識 をもたせる研修の推進と教職員の育成~」 (担当校:伊達東小,堰本小,保原小, 大田小,石田小,月舘小,伊達崎小)

<希望分科会>

【第10分科会(視点1)連携・接続】

「地域とともに生きる学校づくりのための連携・接続と校長の在り方 ~家庭・地域等と連携した地域の特色を生かした学校づくりの推進~|

(担当校:伊達小, 粟野小, 上保原小, 大石小, 小国小, 醸芳小)

本県小学校長会では、組織的研究ということを大切にしており、本支会においても、組織的な研究が推進されてきた。特に、発表した第7分科会の校長先生方には、何度もお集まりいただき、研究内容や発表資料、プレゼン資料等をさまざまな視点からブラッシュアップしていただいた。先月発刊された県小学校長会研究集

録第43集にも、その研究が掲載されているが、 非常に精錬された内容だと思っている。令和2・ 3年度の研究においても、その内容や研究の進 め方、まとめ方はぜひ参考にしていただきたい。 中心として原稿をまとめられた小手小の金子先 生はじめ、第7分科会の校長先生方に、改めて 心より御礼申し上げる。

2 令和2・3年度の研究に向けて

すでに皆様ご存じのとおり、令和2・3年度 の2か年にわたる新たな研究主題による研究が スタートする。令和3年7月には福島市におい て、第61回東北連合小学校長会研究協議会福 島大会・第50回福島県小学校長会研究協議会 福島大会が開催されるので、令和2年度のうち に令和3年度までを見通して計画を立てたいと 考えている。本支会では、【第3分科会 知性・ 創造性(視点2)】「知性・創造性を育むカリキュ ラム・マネジメントと校長の在り方~知性・創 造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善 ~」を担当し、発表することになる。令和2年 度も、校長先生方、特に第3分科会の先生方に ご苦労をおかけするが、ご協力をいただき、福 島大会での発表につなげたい。それぞれの学校 の課題解決のために着実な実践が行われ、研究 主題にせまるために有効な校長の在り方を明確 にできればと思っている。

3 おわりに

新学習指導要領全面実施となり、様々な課題 が山積しているが、県小学校長会長の佐々木先 生がたびたびお話しになっている「子どもたち の幸せのために」を心に留め、私たちの研究を 進めたい。 生徒指導部より 第135号(3)

《生徒指導部より》

生徒指導部調査からみえる今後の方向性

生徒指導部長 邉 見 年 成

(伊達市立月舘小学校長)

はじめに

生徒指導部調査3つの調査から、今後の生徒指 導の方向性を考えてみたい。

1 調査A「子どもたちの心のケアに向けた校長 としての取組」

この調査から見える特徴的な結果は、県全体として「震災によって心に何らかの傷を受けたことが要因と思われる反応を示した児童数」の変化である。震災後、平成29年度まで減少傾向にあったが、平成29年度と比較すると、平成30年度は6倍増、令和元年度は9倍増と驚くほど急増している。この傾向は、阪神淡路大震災の5年後の調査においても見られた傾向である。震災がもたらした子どもたちの心の傷の根は我々大人が思う以上に深く、今後も心のケアを継続して行っていく必要がある。

心のケアの手立てとして、スクールカウンセラー(以下、SC)及びスクールソーシャルワーカー(以下、SSWr)の活用がある。

SCについては、地区では、実に90%(県平 均より12%増)の学校で、のべ2029回活用されている。またSSWrについても、53%(県 平均より5%増)の学校が活用している。このようなことから、地区において、SC、SSWrはなくてはならない存在となっている。

一方で、SC、SSWrの活用の課題もある。 最大の課題は、勤務日数・時間の不足である。これにより、タイムリーな相談や教職員とのコンサルテーションができないという問題が生じている。 限られた勤務時間をいかに有効に活用していくのか、その方策を模索していく必要がある。

2 調査B「「不登校」「いじめ」「虐待」「暴力行 為」の未然防止と早期解消に向けた校長として の取組」

<不登校> 県全体で見ると、すべての学年で不

登校児童が増加し、特に、学年が上がるにつれて 増加する傾向がある。地区の特徴としては、不登 校出現率が低いことが挙げられる。これは、早期 対応、組織的対応、学校での居場所づくり等各学 校の積極的な取組の成果であると考えられる。た だ、平成30年度の県全体の不登校児童生徒数は 小学校438人に対し、中学校1630人と3.7 倍にふくれあがる。中学校で不登校にならないた めに小学校段階で何ができるか、小中連接の中で 模索していく必要があると感じている。

<いじめ> 県全体、地区とも、積極的な認知が進められ、いじめの認知件数が急増している。地区の特徴は、いじめの認知件数に対する重大事態に至った割合が県の3.7%と比べ1.9%と低いことである。これは、いじめを見逃さず、早期対応がされている成果であると考える。ただ、県全体では、学年が上がるにつれて重大事態に至るケースが高くなる傾向にあり、6年生では認知件数の7.6%に及んでいる。この点には十分に留意していきたい。

3 調査C「SNS・ネット利用の実態と校長としての取組」

この調査結果は、県全体と地区の数値に大きな隔たりがない。つまり、スマホ、タブレット等があれば、どこでも同じような傾向にあるということである。家庭での利用となるだけに、家庭との連携を一層深めることが今後の課題として考えられる。

おわりに

3つの調査をもとに、よい面の要因を継続し、 課題である面の要因を工夫改善していくことが地 区の生徒指導の向上に結び付くと考える。

お忙しい中,各種調査にご協力をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

第135号(4) 特色ある教育活動

《特色ある教育活動》

由学に恥じないように

伊達市立伊達小学校長 三 村 隆 二

本校は、伊達町の阿武隈川西地区として発展してきた中央部に位置し、現在441名の児童が学んでいます。歴史も古く、明治5年私塾として始まり、今年度で創立146周年を迎えます。

伊達小学校の3つのシンボル,『由学(由学塾の教育理念の「学びを旨とする」より)』,『夢(夢の実現のために助け合い励まし合う子ども「夢の像」より)』,『けやき(本校玄関前にたくましくそびえたつ「ケヤキ」の木より)』。学校では、それらと「知・徳・体」をかかわらせて教育目標を掲げています。ここでは、本校の特色の1つである知育と由学の関係について詳しくご紹介します。

伊達小学校は、明治6年、金秀寺本堂を仮教場 とし、岡村・長倉村共立の岡小学校として設立さ れました。ところが、実際に小学校が創立される 1年前にすでに由学塾として自主的に私塾を設立 して子弟の教育に当たっていました。教育令が施 行される以前に、これと同等の教育が地元の人々 によって実現されていたのです。これは、この地 域の当時の開明的(優れた洞察に基づいて、新た な分野に積極的に取り組むこと) な雰囲気を示す ものです。このような『学び』をベースにもつ伊 達小学校の子どもたちは、現在学習面でも運動面 でも更には生活面でも歴史に恥じないように頑 張っています。その中でも吹奏楽部はここ数年, 各種コンクールの県大会や東北大会。更に全国大 会で金賞を受賞する素晴らしい成績を残していま す。「伊達小サウンド」を合い言葉に、演奏に自 分たちの思いをしっかり表現し、今年度もその伝 統を守ろうと日々練習に精一杯励んでいます。



第24回日本管楽合奏コンテストより

ふるさと学で「半田プライド」を醸す

桑折町立半田醸芳小学校長 宍 戸 広 子

本校は、桑折町の半田山の麓にあります。昔、地滑り崩壊があり、「はげっペ半田山、登ればつるつる」なんて言われていましたが、先人の努力により植林が行われ、見事に緑が戻りました。半田山の頂上からは太平洋が見渡せて、霊山よりも高い山です。半田ごてや半田づけの語源にもなっている「半田銀山」も学校のすぐ近くにあります。

その豊かな教育環境を活かして、本校では「ふるさと学」を展開しています。産ヶ沢に生息するほたるを題材にしたほたる学習は、幼虫放流や生息地の清掃を主な活動にしています。また、半田銀山と古代からの歴史が織りなす半田銀山祇園囃子の継承は、3年生と4年生が行っています。楽譜がない太鼓の継承は、地域のゲストティーチャーの言葉と実際の叩き方を見て学びます。太鼓の技能はもちろんですが、伝統の心も受け継ぎます。今年度からは、6年生に半田銀山そばの栽培とそば打ち体験も取り入れました。

このふるさと学を通して子どもたちに身に付けさせたい力は、5つあります。「コミュニケーション力と表現力」「主体的に学ぶ・関わる力」「最後まで課題を追求する力」「ふるさと半田を誇りに想う気持ち」「思いやりの心・感謝の心」です。

地域を知り、ふるさと「半田」に誇りをもち、 地域の一員として積極的に関わろうとすることを 本校では「半田プライド」と呼んでいます。

これからもふるさとの教育資源を活用し、学ぶことと社会とのつながりを意識した教育を行いながら、醸芳の名のとおり、半田プライドをもつ賢者能士を育ててまいります。



ほたるの幼虫放流



半田銀山祇園囃子の演奏

編集後記

「伊達は一つ」。4月に伊達地区の校長として赴任した際に、校長会で先輩方から聞かされた言葉です。あれから1年が過ぎようとしていますが、この3月にご勇退される先輩方を中心に、伊達地区は一枚岩であると実感しています。 年度末のご多用の中、玉稿をお寄せいただいた皆様に心より感謝申し上げます。